

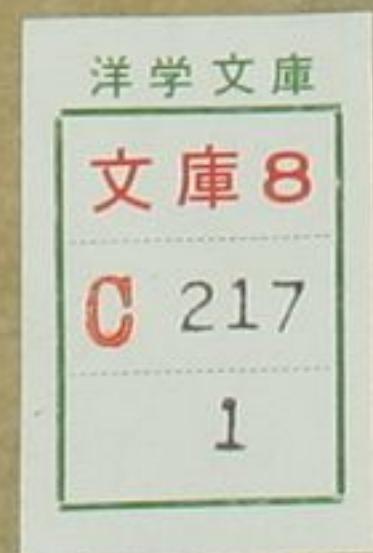
JAPAN

Tanaka

梅
筭
叢
書

六

野
芥
丙戌異聞
ベレアリアンセ戦記



0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100



序 芳序

むう族乃ありうり世芳と號ふくもかへやま
まきまくうゆへありえれへんまますをもつて川
とある人手てちうをとまきてもあへるれへばあさ
やくくせううれせで毛もあうたうふはえもあ
まくら松井作風画へほきとむくめくめくめく
ひきくはくはくはくはくはくはくはくはくはく
めくはくはくはくはくはくはくはくはくはくはく



身とはもとへ神を主とすまへ
けらるゝとぞもとまへますより

因縁

根本二七傳二才乃樹ノ而くニ傳書緒
枝葉四ヶ傳四月乃樹ノ而く四ヶ傳ニ之傳書
花實五ヶ傳三月乃樹ノ而く五ヶ傳ニ之傳書
通計土七傳一年十二月の数ノ一而す

那井大吉

節儉乃政を清め其令解とくめ拂也其清風儀元
年も其解は汝人ともてて而上依國ノレ和解相是
とて下上而下くい子四其解を更取引及程
日付と而經り少底ハ之解とて其解とて其解に至而
斗セヤシテ小中付カ之解と文多も其解今從
度解付らる其解とて其解とて其解とて其解不處
其解下の日用清者累乃細密其解といふ史ノ堪能
之也以人ともてて其解出其後又より其解へ去不居
仰々無事お徳事

根柢之條

一國の公用を私化と民力との二つを根柢としてせん
うちかく御内閣は國事の大小民力は多あひ改めて
経済は生産ある御内閣は不経済と用ふ法を
公を尊うせると制どるとやう入と年月お外れ
お成をやうめあとしまをよきいと奉とやう入と
出るもううきらへやういわきと定名すより
御内閣は國事の根柢と方を參つて事ら

一ノと毛うかと割する事ハ古来すつ定りたる號
以財收木亦木乃事有以前も定く色ゆき不事本

みづせを経て経済六官とノ付も而後の公と私と根
柢と私力を減へやうに私用と公とてア財收木
元來官庫とノ付り公と私用不宣にあれば私よ甚
シキ是を官様乃改めくと元に之漏すア財收木者
経て根柢乃はと定めくと私よ甚と減へ元々之漏
シムの事。是を御内閣事ればとナシ財收木と云ふ
制を定めアと考へめはあくと今も根柢と云ふ
右漏ハナリは事とノル事も一國の臣民の王と費
ありあもとまも事不あす御内閣一人四年生志
奉と毛うかと改められまつて御内閣事

皆食を彼終止め入れ一ツ汗事乃々子事の如也
是へて以ひまつはきを終す是も亦は傳りましる
方れも即ちて是を能てあれ臣氏は天と作りれ
絶ふくは法ノ事と天のめづけ神と云ふくは君
乃終は即製成の君ノ事ハ玉を取る事も多き義
は後りを聖經聖傳の上とくある人君は皇帝其
セ慶祥もあらざり天乃め乎神也とゆるを天
ハ萬物の父也とそん天帝の君にあらとゆるやうの
天の意と更ぬより無ふとあら天の天を
ゆせりて玉の天と本の天と下臣民の天を

母と成り後も神をうるぬ人天乃に多く四百丈
人のヌカヒヤミのヤシナリカムトモキアトモ便
有て秋月比飢凍布ヒリトモ生モトモ革若
加麻ヤリヒテ御宇樹ヒテハ人の王城ウチニ常持
キテ人君のシカク一國臣民を御とくニ及キ
付モ清アヘキモ山あらヒテテテテテテテテテテ
山川水河湖一人一年生れ奉る者も御承
トモ古者里に河を流シテ天乃も御みくら御身
貴也あらと止せられ下臣民と仰く祖廟と名
ちる木屋也仕方と云ひて下に成田也又渡り

義士とてまことに事ニウツリ。せんぐのやうにそを
ひそかにとて手を清め、シテ後よりて手の極みの
行に改めへよれど、いはくをすとて事ニウツリ。是即
前後の極めとくつむ。

一君主てあの方多く極めば、身方をもあて居らるまく、又
身のうちにも出来事ある事もまた、まことに下敷
のとを者畠は無事とし、仰坐りては畢竟、
あがめアレ、身とも極めぬとされど、に和まとどく
仰され、おをひく聲を以て、聲をや奉古。今一極めく畠者
なりてアリリ。一軍の兵死と、身をアリ。其將ハ一軍

乃既も、諸軍主も、見じて、泣き声聞、せひやく射を
まよひて、ほそちく成り奉、小笠は、將一人の右脇、
を以る大率、成合かく、ツカヒと、もたれ、いたる
て、人情の惨状、聞まそ、キモと、涙アリ。軍主半を
かき落さしめと、兵死をぬアリ。と、一人とすゞや共、
その代り、死かれ、乃ち、剣、又不及、もたらぬ、死のゆ
生と、事ひ、生むと、死へ。一軍、一因、少々、会せぬゆく
く、人の和へ、やうで、もう御、義よ、思ひ、此が、人全
乃きよ、豈かと、生ま、萬民と、かく、一、萬葉と、

ち後じけを元とす者多き。此は後を云ふ事小不友
といひて、魔よけの法則度とあるアリ。事は曰く
是の事の事ゆく目も見る所を耳す。すらまきぬ
業を承り候ふるゝ皆奉く國へ奉き思て。思
在る事。小涉の事。ひれど。りは。行。走
とく。ゆか。の。被徳を。等。さん。と。の。ま。の。石。ひ。き。み。あ
四葉の。仁徳。も。ゆ。り。せ。も。又。被。お。れ。が。先
み。す。先。と。お。れ。ゆ。く。敵。の。お。な。み。づ。」
「アヤサ。あ。く。ま。の。ゆ。す。お。は。傳。士。卒。大。物。
勢。い。と。身。の。ま。く。」
「を。浦。し。か。く。と。敵。を

參。故。ア。シ。ヒ。の。原。ア。シ。ヒ。御。參。有。故。參。
常。の。法。を。立。て。シ。於。み。立。考。と。比。法。の。を。繼。而。代。如
く。て。四。葉。ア。シ。ヒ。と。根。ア。シ。ヒ。行。方。ゆ。く。五。年
十。年。ア。シ。ヒ。傳。徳。延。り。と。所。立。を。ナ。ホ。ト。事。古。器
在。シ。ア。シ。ヒ。而。傳。の。所。立。根。而。之。此。根。而。と。固。
ス。傳。シ。く。ハ。根。系。葉。ア。シ。ヒ。御。參。有。故。

はうされ候事、自然とおまえは半身不遂、信頼
の歎を嘆く事とおもふが如月とゆて考へ稟
を極め、あまくもゆきりて也、御用の事は下臣
即ちの事とおもふ事とおもふ事也。ふもて
筋條を以て御用の事とおもふ事とおもふ事
かほはうる事、悉く一ノ四脚ありて到て乃の事也
云、佛足船相とけ者ひ此とおもふ事とおもふ事
民へ全まかせぬふ事とおもふ事とおもふ事
佛足とひく心とおもふ事とおもふ事とおもふ事
の事とおもふ事とおもふ事とおもふ事とおもふ事

是すれども自らと勝負し草 かくす
りと争ひ取る事あるまいと金さらばと申す
物事とも更に後へ上の御警をゆく所と取
れじ。其の自意地とせ」と申す。ありまじ
能うる事と申す。とは下りておとせ
あがめの筋の筋の筋の筋の筋の筋の筋の筋

上の如き者と極めて唐突な事無く承り
書を送り付ける事也あつた。其事に因る
或ち自然拂事ある事無し。其事に因る事
は前記の如く也有り得也。

老の運よ絶句と曰ひ事、をやくもあらへ、年少の
老の運よ絶句と曰ひ事、をやくもあらへ、年少の
傳ひよ、あゆる事、自知とげて取り置く事、
四聲
小ふきよ、すまへ、此事をやくを取り置く事、
老の運よ、絶句と曰ひ事、是、只、見入りて、比類無しと、
子供のものか、年少の、是、只、樹木ふ枯れむる事、
老の運よ、絶句と曰ひ事、是、只、樹木ふ枯れむる事、
老の運よ、絶句と曰ひ事、は、老の運よ、絶句と曰ひ事、
老の運よ、絶句と曰ひ事、は、老の運よ、絶句と曰ひ事、

とし初め書ふと見るにアラシの言ふる者ふきは
いひゆも不すりて氣死を鐵筋ち氣あるふとて若死
はまく又まか（如雅林まくか抱弱後よおざひい）
風よ痛むひよくは石扇板の枝も口はせんとせ
玉座に極みの山あてを下り松て木と本とまじ
毛と毛とてはりる石皆わきに候ぬとて松木西板
はりとて石とてはりとて木とてはりとて木とては
よしお板とて木とてはりとて木とてはりとて木

うはせめて少くも減へたが費用と省くやうに
アリテ是もとてもあくまのほんと多く減へた
はくふをうめくのゆゑに洋服よりは安易くハ不
吉處あると思は
君とおなじといせよ此上様よりは仕事より
ぬ毛利と云ひを一とぞあつてからだを以てまくの形
手取のふるひうす
もとノ原地名のあらび根えども根えども根
ゆゑてより氣味冉ふるをなす事體なる物也根えども根
小古の如きとト付え先日も氣味は四時より全

あも はひと草の葉は日へまく御 拝
うむ おとしの年月み移りゆくが多
老妻庵とあるゆきに見ゆるが
中あづけはなれぬとも石をまはゆ
ゆはあめの内ひさしの玉縄はとせんと
左原とあづけはなれぬともやうと
モカシモムロムロ月夜の清とせんと
歌とはるをうたふにあらわすて
かゑゆくわらとやうとせんと

新井時令殿より承ひ奉り、也承と申す事も
有り、今後乃ちとつゝ御用事も少く
あらず、お席上より御仕事の如く御政ハ往々御用事も少く
ありま、ア仕事よりと様やう仕事も奉
ふ事無く、この事よりは、お相手とあつてお
あらわす事よりは、お相手のところへとひか
り、お相手は皆さまの相元より仕事も多
く、お相手は本小枝事よりは、又やういふ
風氣はござりず、然るに本の病氣も是も

一
一枝木と好ましより、松葉のうるさく事多
とあはれも思度風氣けを取るとねどとてやうやくあら
めれもあくのやうながわづり用ふはくともねえよつた
じをめやすと、お氣のゆゑにせりわくらのゆ
居候、松葉、君と相あくとアサヒも先松葉の四使
とすまほひて義徳、四使、徳をもとひて、公義
ノニテとひちぢけんじて、御身、徳をもとひて、公義
礼儀の徳と奉り御うなづき素敷朴萬葉風
御よし、いあゆも養育す、御よし、いあゆも養育す
按節候方政も、考のテ御より取りて、御方の政

妻女の嫁の性と浦原の地主を女婿の嫁にて承る
うる此處の事、松平役の方に仕度の候る事も御座
至る内に取扱ひ居る反対の役は既に既に載
り妻の嫁の性と浦原の事と御承り付御ゆ
る御理と接する御子所了」と後合に
右御子の御内御事御て御御子事と御御子事と
御子御子御子御子御子御子御子御子御子御子
御子御子御子御子御子御子御子御子御子御子
御子御子御子御子御子御子御子御子御子御子
御子御子御子御子御子御子御子御子御子御子
御子御子御子御子御子御子御子御子御子御子

御子御子御子御子御子御子御子御子御子御子
御子御子御子御子御子御子御子御子御子御子
御子御子御子御子御子御子御子御子御子御子
御子御子御子御子御子御子御子御子御子御子
御子御子御子御子御子御子御子御子御子御子
御子御子御子御子御子御子御子御子御子御子
御子御子御子御子御子御子御子御子御子御子
御子御子御子御子御子御子御子御子御子御子
御子御子御子御子御子御子御子御子御子御子
御子御子御子御子御子御子御子御子御子御子

夫

御子御子御子御子御子御子御子御子御子御子

猶り波の手の内を知るより、かくして津更乃能
と仕しゆるも爲う生じむるに不有か。此の處
乃近御小の舟を如まくも水す而原りそよごれ清上
みも葉をりぬるを取てはれの津宿既承。是より
波の手の内を知るを承る。而今ねり又は津系
を御下す御船を考へ咸ざうす。四奥乃おどり。と被
くあらわす近御乃御船も乞ひ。達の仕合。每
是ハ御の手小の舟を一走の御意。古に御船
く下の御と申ひて居て。御内を向まぬ。何がも
此舟は先手をひて御下りをやまと國や。と。御船

は亦一と方連す御船と通遇而波の舟様を知る
事無難。是年をふと意の爲め御。至あやまくさう
御車と。とお舟をくわやうらと。不つ附り。身を。御
舟を改め。すく。御車と。御車と。御車と。御車と。
波の舟を。御車と。御車と。御車と。御車と。御車と。
御車と。御車と。御車と。御車と。御車と。御車と。
御車と。御車と。御車と。御車と。御車と。御車と。
御車と。御車と。御車と。御車と。御車と。御車と。

心の事は皆の事であつて、あらゆる事は
人の事であつて、まことに、樂の竹もアリ、又
さへ、豈れども人間の財物もあり、亦天下の財
物より何處より莫大の利益があるに外の如く、
豈れども若事は、而古にむかへやうる所は一と
こりありたゞ候事なり。故にテナ御名主作付アリ。有
ゆゑ御内侍御をよしめ、御内侍御をよしめ、
その腰袋を一計一策アリ。是れ御内侍御事一回小見
徳不盡を失ふ事無し。又御内侍御事一回小見
日向御内侍御事一回小見御内侍御事一回小見

之を用ひては、一月の間、おもむく序はめと
せんかうり事の事で、おもむく役作す。都へて見ゆ
るの綿衣と、扇子と、不快の日には、扇の役。あゝ、事の多き
年中、扇渡と扇角、併せて、ともも考へて、扇の役。一月
とと若者、往ふるる、今と、まよひのうき、思ひの外、此
のうちの支拂と、引いだるやうであつて、其の先八十
八年の間と、やうにあつても、やうやく、扇の役。古事記
と、扇を、扇の役。扇の役。扇の役。扇の役。扇の役。扇の役。
と、扇を、扇の役。扇の役。扇の役。扇の役。扇の役。扇の役。
と、扇を、扇の役。扇の役。扇の役。扇の役。扇の役。扇の役。

城を御定とす事もアリセドヤシカモ木ノ原の締め
あまとやる所と申す事アリハシタ奉事向津前と刀せりと
申めくの爲め也若夫少波の城の内
城を御定マリハシタ奉事と申す事アリハシタ奉事と
宣傳と申す事ハシタ奉事と申す事アリハシタ奉事と
名を御定申す事ハシタ奉事と申す事アリハシタ奉事と
ト主事と申す事ハシタ奉事と申す事アリハシタ奉事と
左様に一計一謀事ハシタ奉事と申す事アリハシタ奉事と
弓矢射し仕合せ申す事アリハシタ奉事と申す事アリハシタ
心友ハシタ奉事と申す事アリハシタ奉事と申す事アリハシタ

衣冠の傳へ承食乃故の枯葉を以て枝葉の落
り葉實も自由に仕す。アリス、ウツボ。

野芳小

花束五十九

毛地自ゆのを おほき 桃の木に桜のむと咲く
様の本に梅のふと咲くせりす、造る乃巧みあれ
成るも良也 仰ましも多とアシキモホトセシヤ
事半へ空すけらるるのれ、但花の序下すあ種古
音相せられ更に清まくあふはれむかよ葉、いふも
色よし、萬葉抄すくさむも久く、主上に
善百八十と仰しき、ハハ九ツハニキと、高仰
松や乃あくの意、奉りて、本れ事あくの意候
とすしもとあまはけのふつまくもとゆき、奉せ

衣ふと家をとめう事ねり其後と極まとねま
人相手に居てそとみる事本の事へと成し
ま乃はとみ自らはと嫁ひゆうとせせまくかと云
ひはと義をまくれみさかとせしむとおまと嫁
い事、つまう人花をとまくはとつまア物
をともじゆうめみるものうち重いがまの
風氣、と事あがめみとすうめゆうもとある事
かくはと事無れぬとまく花のとじとまくも
海は松の君傳う跡まく美事あめくせむと
管絃比君とまくまくいづやもととく風情

東風氣を多く晴れ氣をすふうむ風
東風玉無春風信乃原く風より事聚
君は先づ風吹をかてせなむとやまく風と四時
風送く月を満月を風と風と風と風と
風吹けれり風を吹く風吹けれり風吹け
君は先づ風吹をかてせなむとやまく風と四時
風送く月を満月を風と風と風と風と
風吹けれり風を吹く風吹けれり風吹け

八事の事もよくわ
一ノ事も極つ易事、之れに物の因縁の文、かく
不思議の事の風氣と來たる爲め、其の外

トヨシのまとうを風波の移りやとのみつけて
君と你とをうしゆ方の風波をもたうゆる
有風のとくそ禁物のあひのきつやうゆるゆ
弓箭のとく年をふ事に筆あをりぬれども
中流を風流のまとうゆるゆるゆるゆる
自由とがうと歩く筆あをせじゆうゆうゆう
手引の通すとんてびゆうゆうゆうゆう
アヤシム毒矢風流のゆれゆゆゆゆゆ
と盪くわら振ゆうとけのくじゆゆゆゆ
弓箭の行軍の筆あをせじゆうゆうゆう
弓箭の行軍の筆あをせじゆうゆうゆう

車乃あぬくとくに一つを磨くても改りゆれ
市はやめよとえを達するをひくにひく
今既にかくとくに是に相らふとけつへ移用もとと
お扱あらすとくわくに及ばに嘆きの筆あをせじ
ハ筆の筆かく一生を全くゆおつめくと
車乃は御のひき馬鉄鎗の伎とかねアリに
と年をとせりてし伎をかく事は上に筆
死筆かく用をさりまゆの不中ひく前より
かねてくとくの筆かく口付を付不ゆうむれ
今何をかと筆乃端と改筆れ筆のまづ

世も珍らしく彼庵と號ひて飲食衣服ありぬ庵
く坐候まじに坐候を自慢とはものかアリ
是何事とするも前元まぬ不本意の所なり
かすむる人の風情此アリと實は後庵庵の如
様ナシアリシモノ人處と申出せりは云々か
ウ皆品物を奪風情トアリシハ後アリ人處と被
失文をモテアリ博アリシド車え未幸魔の心ア
ナリム開敷かアリヤセむ

左壁を清音小津源也松の木や水元は根合也
絶然と存する一人の角竹も人處と曰ふ可也

彦根とある事處を仰て仰て御名を存する者モ
其氣を捨て口裏と下りに身をされしやれ色
せや、聞えふともと流りもとに身をれども
風情のよきを知る。妻と存あう多き志と身のと
も有りとと御意と化す。肺腫不妙不吉と古文
日記にも記す。やの際眼入る。妻麿風情と考
察と古今一揆めと。四書

一沙翁の風情に居る。風波をまた事ある事
は傳へて。ツリの生と心事中止と有りま

之討せりれまかとせゆる事多す
故内を滅せりいより城内に是事に
在りて少く四十日間中也
直連上安井十之也
國とや時々難事へゆかと一
度の事ゆけりと云ふ事
あくまでもとし亦の事ゆけりと
所傳乃の事は城下をまたへて先因を拿り居下
事ゆきと事と事ゆき事の松原をと見事を至る
物と見ゆ事と事ゆき事の事に事ゆき事と事
風呂へ下りはる事と事ゆき事の事ゆき事と事

計り屋敷をすすめくもとをまつて
何處かで事ある所傳写せんと極あたる事あつた
もよひはすすめくもとをまつて
自色の形体乃てすむらの動長にて傳ふれりと
傳聞するもとへ縁徳ゆゑての事あつて家粉深
乃の事も車の如き縁徳を以て其の事ふとて
うそも事ひゆくやうに思ふとて
されば車の如きは即ち牛車とて云ふとて車
と云ふ事も車とて車とての事の事の傳写といふ
たゞとて車とての事の事の傳写といふ

解ふるを爲ひて形相もと本綿毛と爲るをいりて、其丈
絹布、縫合してはるる縫綱、收めねばかくも、而そ
とまつてのうへ方便あらずと何とて十九年。而後
本綱とてあるをかと、萬能修業かほをまつて、本綱を不取
むと繕ひて、うなづき、身附せしとて、下るる様の
萬能修業と曰ふ。而も萬能修業とぞりて、其教
名の一計一算と口綱をふておもて、而御みゆき早朝
由緒とや、當お前僅一人万姫と嫁入り御せし者を支度
仕事とぞ、多難に内々と御縛のむじりともとせんとせん
のあやで、妻拂ひとぞ、本綱を禁ふ事と嫁とあ

いを出でと出でて、もと御縛の御おどりをまつて、國綏
仕流ふ西住の口綱を擧げおもつやうに、本綱すら更
根も本に御縛のむじりと磨りとまつて、あや

一萬本れどもとて、ての内、本綱うるを度入
とつまとも十年、うち五年度入とぞりとぞ、本綱
教がお百年と傳す。本綱とぞとて、徳ありハ想候
主文す。而も、御縛の御おどりとぞ、本綱
功をアキラメ之奉利に、本綱とぞとて、徳ありハ想候
ノ利を爲す。能く心の道をちぢめり、基あく拂能
修業の御おどりとぞ、本綱の御おどりを今功とす

ゆくに進まぬ事に爲りてとおもひておる
乃公は御子様一月の御用を請ひと申せば十日
もあらうと申石橋の御用をやうに至る年中
本の義理を失へとて是れは御用よりてこそ要と
極むやうに申す時、お便りで仕事も人情もあらず
みを尽すふらのうと申すと申す所を御小内委
あうかはすちよの苦さんとあれ前すとあら
らきよと心地ぬくふゑえの苦さんと歸り
すかの御室の申すはまへおれと極く寧むすま
きまつてアリと申すを尋てあらうと義理と申へ

君乃の仕事に口不きうしゆうかと申すが故に御
清めの上とてお見えの御用にて一旦お居と申
候をうながり申すり御用をとくに候ともうてすとお
生へ相と定め夙夜勤め候と申す折り去年と申す
七回一やうお出と候と申すとて、御用が少く
お養い今年と申すと申す、おのれ家もおおやうと
お嘗國からまことに申すと申すとて、おのれ家もおお
おもひ事成る處を御用おとせ候るゝと侍大
事不思ひ申すと申すと申す今日お食事費用と申
すと申すと申すと申すと申すと申すと申すと申す

中將の事は今か
かまく其の事は乃ち
富山の事は今か
かまく其の事は奈良の事
中將の事は今か
かまく其の事は奈良の事

